http://ncbungaku2013.web.fc2.com/
日・中文学翻訳館／趙清閣＃SE-21　　2018.11. 16

上海のダンスホール

貧　民

一

しとしとと　雨は降る　いつまでも
上海の　夜は騒ぐ　いつまでも
男たちは　タンゴを踊る　いつまでも
ラジオから　「桃花江」の曲が流れる　いつまでも
カフェテリアの　ナイフとフォークの音が響く　いつまでも
貧民は飢え　寒さに凍えつづける　いつまでも

二

女は夫の腕を握って歩いていたが、ちょうど肇周路(チャオチョウルー)の曲がり角を過ぎようとしたとき、体を震わせて水たまりの中に倒れ込んだ。

「秀(シュウ)、秀、どうした？」

阿富(アーフー)は急いで彼女を近くの家のひさしの下に引きずっていった。

「阿富、私もう歩けない。……とってもお腹が痛い！」

阿富はしっかりと彼女を抱き寄せ、お腹をそっとさすった。何か奇妙なものが中にあるように「ぐるぐる」という音が聞こえてきた。

「もう時が来たんじゃないのか？」

「違うわ、まだ二か月あるのよ。……今日は歩いてとても揺れたからよ」

こう言っているとき、女の目から涙がこぼれ落ち、阿富の手にぽたりと落ちた。

「ああ！　私はどうすればいいの？　ただ運命に従えと言うの！」

阿富は腹の中のぐるぐるという音と女のうめき声を聞き、心臓に刃が刺さったような痛みを感じ、涙を流しはじめた。

「悲しまないで、阿富。ちょっと休んだら良くなるわ。あなた行って……食べ物を持ってきてちょうだい」と言ってから、彼女ははっと気がついたように、「そうよ、きっとお腹が空いていたからだわ。阿富、早く何か食べものを持ってきてちょうだい」

しかし、この「生命」への希望に喜びを感じた時、彼女の脳裏には突然、昨日強盗に遭ってお金を盗られたときの光景が映し出された。「ああ！ 何てばかなんでしょう。お金はみんな盗られてしまったのに、あなたにどうやってご飯を買ってきてもらったらいいの？……ああ、死を待つしかないのよ、ここにいて私を抱いていてちょうだい!」

「だめだ、秀!　食べ物を買ってくる。心配するな。安心して寝ていろ。大きな声を出さないで。注意して、家の中の人を驚かしてしまうよ。」

彼は綿入れの上着を脱いで女に着せると、ふらつく足取りで歩きだした。

「阿富、早く帰って来てね! あまり遠くには行かないで。」

女の声がかすかに彼の耳に響いてきた。彼は両腕で自分の体をしっかり抱え込んだ。涙と雨が入り混じって流れ落ちた。

三

彼は歩いた。ぼうぜんとしたまま歩き続けた。大吉路(ダージールー)を渡ると一軒の店の前に立ちどまった。

西北の風が容赦なく吹き付けていたが、彼には寒さがほとんど感じられず、ただ耳の底で女の呻き声だけが響いていた。

「あいつは腹が空いているんだ、ご飯を食べれば良くなるんだ」

こう考えて彼はポケットの中に手を入れて金を取り出そうとした……だが、失望が襲ってきた。ポケットは空っぽだったのだ。

これで阿富の感情がまた高ぶってきた。秀が子供を産んでいる姿が目に浮かんだ。あんなにか弱い体で出産に立ち向かうのだ。彼は急いで来た道を引き返し路地に入った。彼女が軒下で寝ているのが見えて彼はほっと安堵のため息をついた。しかし再び彼女の泣いている声が阿富の耳に響いてきた。彼は急いで路地を出て、斜橋路(シエチャオルー)の突き当りまで行った。すると一軒の菓子店の店先で自然と足が止まった。

一台の車が止まり三十歳ぐらいの男が店に入っていった。店員たちは愛想よく客を迎え、彼はポケットから札を一枚取り出した。すると店員がすぐに菓子箱を一つ渡した。阿富は彼のほうに向かって歩きだしたが、彼はすばやく車に乗り込んで車はエンジン音を吹かせて走り去ってしまった。

阿富は気落ちして数歩後ずさりした。秀が菓子を食べたらすぐに具合が良くなるだろうと思ったのだ。まさにそのとおりで、彼女は「空腹なのが具合の悪い原因かもしれない」と言っていた。

彼はこう考えると我知らず菓子屋の店先に立ち、両手でポケットをまさぐった。だが、やはりがっかりして、手をポケットから出すしかなかった。店員は嫌悪感に満ちた視線を彼に投げた。このとき犬が寄ってきて狂ったように吠えた。

「ちくしょう、同じ人間なのに貧乏人だと犬もばかにするのか！」

犬を罵ってはみたものの、彼は辛くなってそこから離れるしかなかった。

西へ向かった。いい匂いが漂ってきて、それに誘われるようにして歩いていき、彼は一軒の酒場の前で立ち止まった。

ガラスの窓越しに、酒場の中が見えた。蒸籠（せいろ）から吐き出された蒸気のようなタバコの煙がたちこめているのが見えた。彼はそこでまた考えた。「もし焼きたてのパンを食べさせたら、あいつはもっと早く良くなるかもしれない。」

こう思ってポケットに手を入れてまさぐった。これで三回目だ。だが、今回も失望しただけで、そこに金はなかった。

「私はお腹が空いてたまらない。阿富、早くご飯をもってきて食べさせてちょうだい！　もう我慢できない。」

秀の悲しい叫び声が耳に響いてきて、彼は狂ったように両耳を手でふさいだ。

バタンと音がして酒場の扉が開き、中から美しい若い女が出てきた。

たばこをくわえていて、指にはめている指輪が阿富に目の中で光った。

「お嬢さん、お願いです、パンを買うお金をください。女房が飢え死にしそうなんです。どうか貧乏人を助けてください、お嬢さん!」

こう言いながら阿富の目から涙が流れ落ちた。何の力が働いたのかわからないが、彼は思わずひざまずいた。

「嫌になるわ！　どこにあんたにやる金があるっていうのよ!」

そして彼のほうを振り向きもせずに人力車に乗り込んだ。

「お願いです、一回だけお恵みを。お嬢さん！　うちの奴が飢え死にしそうなんです。タバコ一本のお金でいいんです。命を救ってください。」

阿富は気違いのように進もうとする人力車の前に立ちふさがった。ついに居酒屋のボーイが出てきて彼を引き離した。

林蔭路(リンインルー)の曲がり角で彼は人力車に追いつき、幌に手をかけて力を入れてつかんだ。それから一生懸命に人力車を止めようとして手にけがをした。血が道路にしたたり落ちた。

「おい、言うことをきくんだ！」

いかにも慣れているような感じで阿富は車夫に怒鳴った。そして片方の靴を脱ぎ、服に隠し、ピストルのようにして女に向けた。（このやりかたは、以前彼が金を盗られたときのやり方を真似たものだ）

「強盗……？　強盗なの……!」

若い女は震えた。にせものの拳銃が彼女のわき下に付けられていた。

「何を、何をするの？」

阿富は思わずにやりとして言った。

「何をするかって？　あんたにパンを買う金を要求するだけさ」

阿富はそう言いながら、車の中にあった女のハンドバッグを取った。

「あなた、盗ろうというの、盗れるもんですか」

女は力を入れてバッグをひっぱり取り返そうとした。車夫はただ人力車の柄を持っているだけで動く度胸はなかった。阿富は女の手からバッグを奪い取った。

「あんたは俺が盗れないとでも思っているのか。あんたが命の恩人になることを捨ててしまったんだ。だから俺はこうするしかないんだ。」

つづいて女の頬に平手打ちを一発食らわせ、阿富はバックを抱えると左の道を走っていった。

後ろから聞こえていた自動車のクラクションはさらにはっきりと聞こえてきたが、彼は天を駆けているかのように全速力で走り続けていた。女のうめき声が耳に響いた。彼はすべてを忘れ、ただ女に食べ物を買っていくことだけを考えて走り続けた。

クラクションが大きく一回鳴り、車がバーンという音を立てて停車した。運転手が車輪の下から血だるまになっている阿富を引っ張り出した。

そのとき警官が走ってきて、運転手に意外な一言を放った。

「有難う、強盗を捕まえてくれて!」

1930 年代の上海

四

今まで夢を見ていたかのように、阿富(アーフー)はとつぜん目を開いた……どうして自分がここにいるのかわからなかった。

「おれはどうしてここに来たんだろう？　秀はどこだ？」

こう考えていると女の声が耳に響いてきた。

「 阿富、早く帰ってきて。遠くに行かないで。とてもお腹が空いているの。早くごはんを食べないと」

そこで彼は手で体を支えながら立ち上がり、壁に沿ってゆっくりと歩いた。とつぜん氷のように冷たい鉄の柵に手が触れて、鎖がかかっているのが目に入った。そこまで行って彼はまた倒れた……

鉄製の窓の前にぶら下がっている電灯の暗い光が、牢獄の片隅を照らし出していた。怪我をしている阿富は体をかすかに動かしながら、これまでのことを思い出した。

二か月前にＡ工場をくびになり、彼はこのような状態に陥ったのだ。何という不幸な人間だろう。

もともとは中等教育まで受けていた青年なのに、両親が亡くなったために婚約者の家を頼りにしなければならなくなった。

ところが、婚約者の父は態度を変え、娘を彼に嫁がせることを拒んだ。

彼は志気のある青年だったので、その日の夜に家を出ることにした。そのとき、まさか婚約者の秀も彼と一緒に家を出ることに同意するとは、考えていなかった。

二人で東洋のパリと呼ばれた上海に着いた後、友人の紹介で阿富はすぐＡ工場で働きはじめた。秀は縫物の仕事をしながら日銭を稼ぎ、二人の生活は穏やかに過ぎていた。

しかしこのような日々は長くは続かなかった。阿富が病気になり半月仕事を休み、病気が治って工場に行ったときに、くびを言い渡されたのだ。

長い間の失業で家計はだんだん苦しくなり、家賃を二か月滞納したとき、大家は厳しい取り立てにやってきた。

どうしようもなくなって、秀は自分の服と家から逃げるとき持ってきた二個の金の指輪を阿富に渡し、質入れさせた。

彼らにはほんとうに運がないようで、阿富が質屋から出てきて戻ってくる途中強盗に遭い、持っていた金をすべて奪われた。その翌日、大家から家を追い出された。

秀はこのとき妊娠四か月だった。昨日の雨の降る夕方、二人は閘北(上海市中心区の北部)を離れた。身重の秀には大きな負担だった。そして歩き続けてとうとう彼女は肇周路の入り口のぬかるみに倒れてしまったのだ。

彼女は空腹だった。飢えは彼女の生命をおびやかしていた。それで阿富は彼女に何とか食べ物を用意するぞと決心した。しかし、阿富は一銭も持っていなかった。それでどうして妻の食べ物が用意できるか。

だから彼は他人に頭を下げて、金を恵んでくれと頼むしかなかったのだ。彼はあの女が自分のことを哀れに思い、妻を救ってくれると期待した。それなのに彼女は彼を侮辱したのだ。どうしてこれに我慢できよう。

とうとう彼は望みを失った。金持ちは少しも耳を貸さず、平気な顔をして立ち去っていく。飢えと寒さの苦痛の中で、阿富は道徳について考えることはできなくなっていた。彼はただ妻を救わなければと必死だった。だから、あの日自分から金を奪ったあの男と同じ行動、つまり一般的には強盗と呼ばれる行動を取ったのだ。

彼は自分が罪を犯したのだとは認めなかった。彼は首相が言ったことを覚えていた。「およそ国民たるものはすべて、社会に生存する権利を求めることができる。」

彼はいまこの理論を実践したのだ。だが、何の効果も同情も、そして許しも得られなかった。それで秀のために、食べ物を買うために金を奪ったとき、彼はひどい懲罰を受けることになったのだ。

その上、ついには自由を拘束され、秀のところに戻ることができなくなった。彼はいま犯罪者になったのだ。

「阿富、早く食べ物を持ってきてちょうだい。もう私を待たせないで、早く来て」

秀の声がまた耳の中で響いた。彼は秀の命のことを考えて怖れた……ひょっとしたらもう秀は飢え死にして、倒れているのではないだろうか……

ここまで考えたとき、彼の頭の中のどこかで何かがポンといって破裂したようだった。彼は両手で頭を支えよろよろとしながら鉄格子の前に歩いていった。すると、すぐそこに秀の姿が見えた。彼は気が狂ったように鉄格子に飛びついた。

そして息絶えるまで、かすかな声を出しつづけていた。

「秀、待っていてくれ、すぐに戻るよ。秀……すぐに戻るから、安心して待っていて……」

この時、蛍火のように点滅していた電灯が消えた。まるで運命が審判を下したこの死者を悼んでいるかのように。

五

しとしとと　雨は降る　いつまでも
上海の　夜は騒ぐ　いつまでも
男たちは　タンゴを踊る　いつまでも
ラジオから　「桃花江」の曲が流れる　いつまでも
カフェテリアの　ナイフとフォークの音が響く　いつまでも
貧民は飢え　寒さに凍えつづける　いつまでも

中華民国 23 年(1935 年)、上海三興坊にて

❒❒❒❒❒